
Talkin' Talking☆彡

美希マコト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

T a l k i n ' T a l k i n g ☆ シ

【Nコード】

N 4 9 5 1 S

【作者名】

美希マコト

【あらすじ】

とある高校に、不思議な同好会が存在している。その名も会話同好会。

ディスカッションなどを中心にコミュニケーション能力・対応力といった、社会に出た時に必要不可欠となる能力を養っていく。という事を活動内容、活動目標に掲げている同好会なのだが、その実態は…

青春してない、一人ぼっち達の、ゆるギャグ短編読み物『T a l
k i n ' T a l k i n g ☆』

―とある高校に、不思議な同好会が存在している。

その名も「会話同好会」

構成員は3人＋幽霊部員（名義貸し）の2名＋そして顧問の先生の計6名。（先生以外は全員女）

趣味はネットと読書の『チカ』

趣味はネットとゲームの『アキ』

趣味はネットと絵の『松子』

そして顧問の『先生』。（趣味はネットとゲーム）

提出した書類によると、ディスカッションなどを中心にコミュニケーション能力・対応力といった、社会に出た時に必要不可欠となる能力を養っていく。という事を活動内容、活動目標に掲げている

しかし、その実態は・・・

会話することがとても苦手な人間たちの、微妙な距離感と、重い空気、1番音を発しているのは壁にかけられた「時計」という始末。

そして今日も、昼休みに「昼会」と称した彼女たちの、血と汗と涙にまみれた噛み合わない、必死さ溢れる努力の結晶を確認することができるのでしょうか・・・

―チクタクチクタク

まるで、取調室のような無機質で重い空気。
時計の針が動く音以外一切しないこの1室には、驚くべき事に人間が4人も存在している。

―チクタクチクタク

何の合図も無く、そして物音一つ立てずに各々が昼食を取り始めた。その姿は決して『ランチ』と表現してはいけない、何か苦行のような物が伺える。

戦地に赴く寸前の、兵士の軽食。

―昼休み開始から10分、まだ誰も・・・言葉を発していない。

やがて、全員が昼食を食べ終わる時間が来る。必ずやってくる。始まりがあれば終わりはくるのだ。

お弁当箱には底があり、そして時間にも限りがある。

やがて昼休みも折り返しに差し掛かった。

―残り30分

廊下では学生の声が絶え間なく響き渡っている。
早く昼食を食べ終わった者たちのが最高に盛り上がりを見せる、昼休みにおけるゴールデンタイムが始まるのだ。

円を描くかのように配置された机は、もちろん誰とでも話す事ができるようにである。

しかし、構成員たちにとって、その配置は計り知れないプレッシャー、重圧がのしかかっているのだ。

・・・・・・・・。。。

―チクタクチクタク

この同好会には、まだ「部長」と呼称される役員は決められていない。

―チクタクチクタク

おそらくであるが、今「部長」を決めなければならないとすると、1人、古今奮闘している「時計」を「部長」に就任させることになるからだ。

短針が、また一つ動き・・・昼休みも残り10分ほど差し掛かろうとしたその時

1人の人間が動きをみせた。

『先生』だ！

『先生』は重い腰をあげ、ゆっくりと椅子から立ち上がったのだ！！

前方、やや斜め下に視線を落としていた残りの3人が、その気配にハッと息を飲む。

——緊張が走る

次の瞬間、誰もが驚く現象が起こっていた。
まるで空から天使が舞い降りてきたかのような錯覚を覚える。

人類が火を発見してから50万年ほどの間に、これだけ文明は進んだのだ。

なんと

・・・それまで重い空気が漂っていた1室に光が灯ったのである。
文明の力、極まれりし「電気」という名の「光」が、周囲を輝かせる。

パッと、部屋が明るくなった。

暗かったのは、自分たちのせいではないのだ。と一同が安堵のため息を吐く。

昼休み開始から38分ほど、ようやく部屋に明かりが点いたのであった。

それはまさに晴天の霹靂。

次に動きを見せたのは『アキ』である。

先生の驚くべき行動により、次は自分も！今なら自分も！と一緒の波に乗ろうと必死さが伺える。

腕が微妙な上げ下げを繰り返す。

『アキ』の挙動を皆が気づいてしまった。

みんなの思いは一つになる。

『アキ』が行ったら、次は私が波に乗る、その次は私が・・・と言葉にしくとも伝わる思いが、連帯感を生み出す。

みんなの期待が高まる！！

―チクタクチクタク

「・・・・・・あ・・・・・・うう」

みんなの視線から伝わるプレッシャーに負けてしまい、時期を逃してしまった。

『アキ』は、挙げかけた手を・・・完全に机の上に乗せた。

!!!!!!!!!!!!!!

――またしても緊張が走った

熱気の籠った部室が、またそれまでの重い空気に戻っていく。

『先生』が意を決して行った行為が・・・無駄になりかけていく。

しかし、『アキ』を責めることは、誰にもできない。

むしろ自発的に動こうとした『アキ』を褒め称えるべきなのだ。

「よくやった!!!! 1歩には満たなかったけど、くは大事な半歩を踏み出したんだ!!!! おめでとう!!!!!!」『アキ』以外の3人は心の中でそう思っていた。

―チクタクチクタク

昼休み終了まで残り5分となった・・・。

これにて本日の「昼会」は終了と誰もが思った。

しかし……奇跡の始まりはここからだった。

―残り4分47秒、1人の様子に変化が見られた。

ガタガタガタ……がたがたがた

バンツツツ!

「せ、せせせせせせせんせんせせえSんん、あのあのああああのののせんせせせせせえせせせせ……先生ッ!!!!」

机の音に全員が驚き、そして立ち上がった『アキ』の必死の形相にも驚き、裏返ってはいるものの大きな声に驚いた。

やりすぎだ…危険すぎる。

今日のMVPは電気を付けるという偉業を成し遂げた『先生』に変わりはないのだが、『アキ』だって今日はゴールデングラブ賞ものの活躍を見せたはず…それなのに……それなのに、まだ頑張ると言うのであろうか

もういいんだ『アキ』、止めてくれ。自分を大事にするんだ…『アキ』！…！！

『アキ』以外の全員が困惑の表情を浮かべる。

大音量の後に訪れる、静寂がすぐ後ろまで迫っている、どうする？でも誰が繋ぐ？と結論を先延ばしにする事で精一杯な3名は、視線を合わせないように、静かに目を背け始める。

「あ…あああああのおのおお…！！！！」

「き、きききききき昨日のテレビ！おとおもおもおも面白かったですねッ！！！！」

まさかの集中砲火

『アキ』が禁断の呪術「連続魔法」を発動してしまった。

『アキ』は今日で死ぬ気なのだろうか…もう後戻りはできなくなるんだぞ。と皆が心配の眼差しを『アキ』に向けた。

―チクタクチクタク

残り時間は3分台に突入している

顔を真っ赤にして、縮こまり、今にも泣きそうになっている『アキ』を見て、1人の少女が面を上げた！

「そ…だね、…のうは…ニュ…た…よ」

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

全員が「心」で感じ取った。はっきりと聞こえた…あの『松子』がしゃべったツツツ！！

―そうだね、昨日はニュースを見たよ

誰から始める出なく、自然と拍手が巻き起こった。スタンディングオベーション

『松子』一人を褒めたたえているわけではない、ココに居る全員が頑張った結果が今日だ。

切り込み隊長として、そして年長者として、電気を付けた『先生』の男気。

次に、文句無しに今日の主演『アキ』、今日の彼女なら圧倒面接すら耐えられるリア充ガールになれであろう。

そして高難易度の技である「返答」を見事成し遂げた『松子』。
最後に、全員を最後まで見守っていた『チカ』。

誰か一人でも欠けていたら、今日のような結果にはならなかっただろう。

皆に拍手だ。

2分間ほど拍手を続け、喜びと達成感を噛みしめていた「会話同好会」は、やがて鳴ったチャイムの音と共に、こちらは音も無く解散していった。

おわり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4951s/>

Talkin' Talking☆彡

2011年10月8日23時36分発行